

◆「日本史」の始まり

高校までの歴史の授業で不思議だったことの一つに、邪馬台国の女王・卑弥呼の存在があった。例の「鬼道に仕えよく衆を惑わす」という人だ。もちろん彼女について書かれた書物はそれこそ星の数ほどあり、謎めいた存在であることは間違いない。ただ、何より気になるのは、その「後」の様子である。特に気になったのは、彼女の存在と天皇家の系譜（皇統）との関係だった。彼女は「天皇」ではないのか。

卑弥呼が使者を送ったのは、『三国志』で有名な曹操の孫である魏の皇帝・曹叡の時代。もちろん彼女は3世紀の実在の人物である。なぜ実在だと言い切れるかという点、『三国志』が「歴史書」だから。彼女は王朝ごとに歴史書を編纂する文化を既に有していた中国に使者を送り、そこに記録されたわけである。

そうしたこともあって、「卑弥呼」という漢字の名前は彼女が自ら付けたものではない。なんらかのかたちで「ひみこ」に近い発音の名前だったとは思うけれども、当時はまだ漢字が使いこなされていない（もちろん平仮名もない）。「卑弥呼」の名前は、発音を聞いた中国からの当て字である。

そうしたことを記録している『三国志』の一部としての『魏志倭人伝』は、晋（西晋）の人である陳寿によって3世紀の後半に成立した歴史書である。3世紀前半、卑弥呼から魏に使者が送られたときから半世紀ほどのあいだに書かれたということになる。つまり『三国志』は、言及する王朝が滅んだずっと後に成立した『後漢書』などと違い、次の王朝である晋の早い時期に成立した、当時の「現代史」なのだ。多くの「歴史の証人」が存命だったはずで、いわゆる「オーラルヒストリー」も試みられたかも知れない。陳寿自身も三国動乱の末期、蜀の滅亡後に洛陽に移り住んだ人であるという。

気になり始めれば、次のようなことも気になる。7世紀初めより、継続的に中国に遣いを送るようになったとき（遣隋使）、かの地で手に入れたであろう歴史書（当時すでに『三国志』『後漢書』は成立している）に「卑弥呼」の名前を見つけたであろうということだ。

（少し時代は進むが）『唐書（旧唐書）』の8世紀頃についての記述には、[使者たちは]「得る所の錫賚にて、^{ことごと}く文籍を^か市い、海に^{うか}泛びて還る」とある。つまり、^{たまわ}賜った宝物をすぐに売ってすべて本に代え、海を渡って帰って行ったそう（私はこの小さなエピソードが大好きだ）。

その中に中国の歴史書が含まれていたであろうことは想像に難くない。となれば、「卑弥呼」と呼ばれたかつての「倭王」が自分たちとどのような関係にあるのか、説明しなければならぬはずだろう。一体どうしたのだろうか？

歴史の授業でも、どうもそこがごまかされているように感じたのである。同じ『唐書』には、さらに次のような記述がある。

「日本国は、倭国の別種也。或いは曰く、倭国自ら其の名の雅やかならざるを^{にく}悪み、改め

で日本と為す、と。或いは云う、日本、旧くは小国なれども、倭国の地を併せたり、と」さらにこの部分の直後には、次のようにあるのである。

「其の人、[唐の]朝[廷]に入る者、多くは自ら大を矜り、実を以て対えず。故に中国は焉を[どこまで真なりやと]疑う」

中国側は納得していなかったようだ。何よりも、「倭」と「日本」の関係が彼らにはよく伝わっていない。だからこの『唐書』には「倭国伝」と「日本伝」の両方があるのである。

ただし、これらのことを教えると、きっと「日本史」教育は混乱する。

それでも諸説あるなか、おおよその話として、「倭」と「日本」についての区別を簡単に教えておく必要があるのではないか。このあたり、歴史を「体感」するためにも重要なポイントのはずである。

まず、「親魏倭王」の称号や「魏志倭人伝」というタイトルに見られる「倭」とは、中国から見た、だいたいこの列島に住む人々についてのざっくりした総称（他称）である。その細かい内部事情について、中国の側にあまり深いこだわりはなかつただろう。「あのあたり」は全部「倭」でしかなく、そこに住んでいる人は「倭人」。逆にだからこそ、古代の「倭」の有力者たちは中国に対して使いを送り、(中国からすれば)「あのへん」のナンバーワン、あるいはまとめ役としての「倭王」について名乗りを認めてもらおうとしたわけである。

ずっと後、中世に活躍する「倭寇」のどう猛なイメージにより、「倭」の意味も少しは変わったかも知れないが、一方で「倭」には「矮小」の意味もある。いずれにせよ、徳の低い人のことだ。これは未だに東アジアの意味秩序に影響を与えている。つまり、「倭」とは、当事者による名乗りではなく、「文字の文化」による一方的なラベルなのであった。もちろん、侮蔑の意味を知りながらも、漢字を持たず、書物を作ることができない「倭人」たちは、その力を後ろ盾とする必要もあって「倭王」の称号を欲しがった。

けれどもある時点で、そうした「ざっくりとした総称」である「倭」を捨て、「倭王」の称号を欲しがらなくなった。それは、「日本」を名乗り始める必要性があったということだ。こちらは、漢字を使った自称である。それはいつの頃のことだろうか。

ところで、「倭(わ)」を、より良い意味の「和(わ)」に置き換え、それが諸処を統一し「大」きい「倭」になった、というのが「大和」である。そう考えなければ、「大和」という漢字の読みが「やまと」である理由が分からない。これは現在の滋賀県にあたる「近江」の読みが「おうみ」であるのと同じで、意味から来る当て字である。「倭(わ)」を「和(わ)」に置き換え、「大」をつけて、自分たちの集合表象である「やまと」の読みを当てたのは、当時の支配層のナショナリズムだろう。

そうした支配層のナショナリズムの決定打として「日本」が考案されたのは、もう少し後になる。その起源にもいろいろな説明があるようだけれども、国号としての強固な自覚を伴うようになったのは、8世紀、奈良時代における『日本書紀』の成立と関連している。

歴史の授業で疑問に思ったのは、このあたりのこともあった。もう少し言えば、「日本」という国号ができる以前について、果たして「日本史」は可能なのかということに関連す

る。不可能だと言っているわけではない。ある地域や人々の「歴史」が、どういった意味で『日本』史で扱う内容となるのかということに関する説明、あるいはそもそも「日本」の定義、あるいはその同一性が「日本書紀」という歴史書の成立と関連しているということをお教える必要はないのだろうか、ということである。

ただそれでいて、『日本書紀』に、「卑弥呼」という名前の人物は出てこない。けれども、それで本当に大丈夫だったのだろうか。『日本書紀』は漢文（当時の中国語）で書かれ、「中国に自分たちの正統性をアピールするための歴史書」だと教わるのに、である。繰り返すように、ここで中国側は「倭」と「日本」の関係がよく分からなくなっており、その正統性を少し疑っているようにもみえる。新規の国号「日本」がうさんくさく思われていた可能性である。

卑弥呼に関しては、神功皇后に当てはめようとした形跡があるという。けれどもこれも無理な話だ。60年単位の年代のズレもさることながら、何よりも、卑弥呼を神功皇后に当てはめ、皇統の一員にしてしまうと困るのは（「天皇」ではなく「皇后」と位置づけようとするとその表れか）、「女王」である卑弥呼との関係が混乱すること、あるいは男系ではなくなるということだろう。『魏志倭人伝』にあるように、卑弥呼には弟王がいたはずなのだが、結局彼は「天皇」ではなく、彼女の後継者は登与という一族の娘となるのである。

事実を教えているはずの日本史であっても、いろいろ気にかかってくるのが次々と浮かんでくる。このあたりの「事実」を審^{つまび}らかにする論争に加わるつもりはないけれども、ここでははっきりと書いておきたいのは、日本史の教科書では、『日本』史の成立のあたりで歴史を歴史として語る基準が変わっているということだ。

もちろん本格的な歴史書の編纂が企画される天武天皇以前の時代については、他国の歴史書を根拠として用いるのは仕方ない。文字によって記録する文化が貧弱であった。そもそも歴史書編纂というのが、外国産の政治技術の輸入なのである。だからこそ、外国からこれを一生懸命学びながら「日本」という国号が成立したこと、そしてその成立に伴って、破棄・消去されたかもしれない数々の「そうでない」歴史が存在していた可能性について、言及しておくことが歴史の理解を豊かにする。

狭義の「日本史」が奈良時代から始まることになったとしても、それでも世界有数の歴史を持つことには変わらないのだから。

◆内乱と神話

もう少し話を続けよう。

蔑称が込められた「倭」の代わりに国際的な国号としての「日本」を名乗ろうとしたとき、まさに同時に、日本にも「文字の文化」としての歴史書『日本書紀』が誕生した。その成立をめぐる中心人物は、本格的な律令国家＝奈良時代を準備した天武天皇。古代史最

大の内乱、壬申の乱（672年）を勝ち抜いた英雄である。

そもそも内乱というのは、それが内乱である限り、統一される「全体」が意識されてなされる戦争である。つまり、自ら「内側」と定めた範域を越えてなされる「征服」や「侵略」の意味論を併せ持っていない。天武天皇は「内乱」を戦うことで、それがまさに統一されるべき全体であることを遂行的に示す。それがまさに「日本」であった。

そのため「内乱」は、その終結後の再統合のプロセスを伴ってもいる。対立を解き、共に生きることを約束する、というプロセスだ。例えばアメリカの大統領選の後の両候補のエールの交換のようなもの。これこそ、思いっきり「内乱」したあとにお互いを称え合うという、いわば制度化された内乱なのだろう。

壬申の乱で天武天皇が倒したのは、これまた古代史のヒーローである天智天皇（中大兄皇子）の息子であった大友皇子（弘文天皇）。むしろ逆に言えばこのあたり、天智天皇を自分に並ぶ古代史のヒーローにすることで、天智系と天武系の「和解」を進めようとした側面があるのだろう。天智天皇は若かりし日に、天皇家を圧迫していた豪族を敢然と倒した皇子。乙巳の変（645年）である。

日本史を学んでいるときに、この中大兄皇子（天智天皇）らによる乙巳の変（私が習った当時は「大化の改新」と呼ばれていたけれども）をめぐるできごとが妙に生々しく感じられ、躍動感に満ちていたことを思い出す。若き皇子の清冽なイメージ、陰謀の大胆さとリーダーシップ、決断力が「蹴鞠」のエピソードなどと絡む。まさに「改新」と呼ぶにふさわしい。つまり「神話」だ。

だからもう一人重要なのは、天武天皇の妻・持統天皇だろう。彼女は天智天皇の娘でもある。「夫」と「父」に古代史のヒーローを持つこの持統天皇こそ、古代最大のヒロインである。彼女に視点を置けば、父が勝ち取った乙巳の変、夫が勝ち抜いた壬申の乱こそ、「日本」を成立させる二つの「内乱」である。

だからこの二つの（当時における）「現代史」的エピソードは、『日本書紀』の重要な柱であるし、間に挟まる持統天皇をヒロインとして輝かせる。

ただ二人とも国内の政権争いを勝ち抜いた人であり、対外的なヒーローではない。特に天智天皇などは、斉明天皇^{たす}を扶けた中大兄皇子時代に白村江の戦い（663年）で新羅・唐連合軍に敗れている。

必要とされた穴を埋める、対外的なヒーローが5世紀末～6世紀初めの推古朝の「聖徳太子」。彼こそは、日本側の歴史書において重ねる人物が置かれなかった「卑弥呼」と違い、中国の史書（7世紀成立の『隋書』）に「多利思比孤^{たりにしひこ}」として描かれ、8世紀成立の『日本書紀』において聖徳太子に矛盾なく重ね合わされている。

彼こそは、東アジアにおける国際的な政治家の一人だった。遣隋使の手紙の文面には、隋の煬帝にタメを張ろうとしたエピソードが残されている。「天才」とされる人物像によって、それが補強される。

「多利思比孤」に重ね合わされた「聖徳太子」という天才的政治家の創造。これらもまた、

『日本書紀』の成立と関連している。そしてそれは、「皇帝」のコピーではあるけれども、それと外交的にタメを張ることのできる存在である「天皇」という存在を、それまで「倭」とされてきた地域に新たに生み出すことにも繋がった。

かれらはみな、それぞれ英雄であり、神話「的な」人物である。超能力や「天孫降臨」だけが「神話」の条件なのではない。古代史（当時の「現代史」）は神話的な制作に満ちているのだ。ここで歴史の「体感」にとって求められるのは、そうした真／偽の判断にとどまらない想像力や「創造」の働きを、まさに「歴史」（ここでは「日本史」）の成立の瞬間に見つけ出すことなのである。

参考文献

加藤徹『漢文の素養——誰が日本文化をつくったのか？』（光文社新書、2006年）

藤堂明保・竹田晃・景山輝國注『倭国伝——中国正史に描かれた日本』（講談社学術文庫、2010年）

遠山美都男『天智と持統』（講談社現代新書、2010年）